

# ON THE SPOT

## 現場から

### ●スポーツと価値

## スポーツ白書最新版刊行 日本のスポーツを考える

5年に一度、国内外の豊富なデータに基づき、日本のスポーツの現状を詳細に分析し、今後の方向性をまとめたスポーツ白書が刊行されている(笹川スポーツ財団刊行)。

最新版の刊行にあたり、去る3月29日に日本財団ビル(東京都港区赤坂)にて、「日本のスポーツを考える」と題した、SSFスポーツセミナー2006が開催された。

同セミナーは二部構成で行われ、まず海老原修氏(横浜国立大学教授)が「わが国のスポーツの現状～スポーツ白書最新版から～」と題し、最新版スポーツ白書の概略を解説した。

全10章で構成されているスポーツ白書(各章項目については別表参照)だが、今号ではトップスポーツの現状と課題、スポーツの法的側面といった新たなテーマが加えられ、



新たに発刊されたスポーツ白書最新版

プロスポーツチームや企業スポーツの現状と課題について焦点をあてたものから、プロスポーツ選手のセカンドキャリアについて、さらに、リーグ組織の法的側面や紛争の解決などが含まれている。

海老原氏は冒頭で「これは“健康”でも“体力”でもなく“スポーツ”白書である」とし、各章で触れられている内容の概略を説明、最後に「競技スポーツと生涯スポーツという2つの区分だけでは、スポーツの現状は語れない」と述べた。

続いては、岡野俊一郎氏(IOC委員、JOC理事、FIFAワールドカップ組織委員会委員)、荻原健司氏(参議院議員、JOCアスリート委員会委員)、小野清子氏(参議院議員、JOC副会長、SSF会長)の3氏をパネリストに、原田宗彦氏(早稲田大学スポーツ科学学術院教授)がコーディネーターを務めたパネルディスカッション「スポーツの新たな価値の発見～これからのスポーツ振興について～」が行われた。

ここでは白書でも取り上げられて

### ■スポーツ白書最新版各章

- |      |                  |
|------|------------------|
| 第1章  | 日本人のスポーツ参加動向     |
| 第2章  | スポーツ施設           |
| 第3章  | スポーツクラブ          |
| 第4章  | スポーツの人的支援        |
| 第5章  | トップスポーツの現状と課題    |
| 第6章  | スポーツ進行のための財源     |
| 第7章  | スポーツに関する情報・メディア  |
| 第8章  | スポーツイベントと振興プログラム |
| 第9章  | スポーツに関する行政制度     |
| 第10章 | スポーツの法的側面        |

いるスポーツの現状から浮き彫りにされる課題を1つずつテーマとして設定し、パネリスト各氏がそれぞれの見解を述べた。

なかでも印象的だったのは、原田氏から「トリノ五輪の成績をふまえ、今後の日本のスポーツ環境、強化、育成、普及、施設はどのように進められるべきか」という問いに対し、岡野氏が述べた「普及と強化はイコールではなく、いくら底辺が伸びたとしてもそれが頂点につながるとは限らない。普及を目指すのであれば、まずトップを噴火させ、そこから下の土台をつくること」という言葉である。まず“強化”を最優先に挙げたフィギュアスケートで荒川静香選手が金メダルを獲得したことで、そこから子どもたちのフィギュアスケート人口が増加していることを例に、「これからのスポーツ界に求められるのは噴火型での強化と育成、そして普及と言えるのではないか」と述べた。

この他にも、幼少期により多くのスポーツに携わったほうが、将来に活かされることが多いということや、世界各国との取り組みの違い、今後各団体が取り組むべき課題などについて、岡野氏だけでなく荻原氏、小野氏からの意見が述べられるなど活発な議論が展開され、最後は今後のスポーツ界発展に向け、スポーツ白書が担う役割への期待が述べられ、締めくくられた。

スポーツ白書の詳細などについては、笹川スポーツ財団ホームページ(<http://www.ssf.or.jp>)をご参照いただきたい。

## ●ランニング学会

## マラソンは芸術か？

去る3月25・26日の両日、「マラソンは芸術か？」をテーマに、「第18回ランニング学会」が開催された。当日会場となった東京工芸大学（中野キャンパス）は、その前身は写真大学という写真を専門に学ぶ学校だったということもあり、さまざまな側面からマラソンの芸術性を考えてみよう、とセミナー以外にも、大島幸夫氏の写真展「大島幸夫の走るアート・世界のビッグマラソンをフォトラ」が同時開催された。

また今大会は、講師として坂口泰（中国電力）、遠藤司（SB食品）、山口衛里（天満屋）、川嶋伸次（東洋大学）、花田勝彦（上武大学）、佐藤敏信（コニカミノルタ陸上競技部ヘッドコーチ）、浅井えり子（ソウルオリンピック女子マラソン代表）といった錚々たる方たちがシンポジストとして大会に華を添えた。

大会プログラムの詳細は、ランニング学会ホームページ（<http://www.e-running.net/congress.html>）で確認いただくとして、今大会のシンポジウムⅤ「選手から指導者へ——勝利の美学を追求する」（シンポジスト：川嶋伸次、花田勝彦、佐藤敏信、浅井えり子）では、話が各氏の選手時代のレースの心理作戦にまつわるエピソードや、指導者としての選手

への対応について進められた。とくに箱根駅伝についての問題提起について、ここで各氏のコメントを簡単に紹介する。

花田氏は、高校生を勧誘する際に「世界を目指そう」と話しても、「うちの子は箱根駅伝に出てくれれば十分なんです」という親の反応が多く、「大学で長距離をやる＝箱根駅伝」という図式ができていることを話した。花田氏が指導する上武大学は駅伝部創部3年目なので、これから箱根駅伝出場を目指すことも使命ではあるが、それ以上に「世界に通用するトップ選手をつくるのが指導理念の1つだと思っている」と語った。

実業団で指導する佐藤氏は、今では高校卒で入社する選手は少なく、ほとんどは箱根駅伝を走るために大学に進むと言う。したがって、大学卒で箱根駅伝を走った選手を必然的に勧誘することになるが、箱根で活躍した自分から脱皮できず、世界を目指す気持ちに目覚まさせるのに時間がかかる選手もいるのだと言う。箱根駅伝の過熱ぶりが、日本の男子の長距離界が女子に比べて出遅れている要因の1つではないかと将来を危惧していた。

川嶋氏は、箱根駅伝を目指す大学の指導者の課題として、マスコミの影響が大きいのも事実だが、指導者の指導の仕方にも問題があるのではないかと話す。箱根駅伝は1人の選手を強くするよりも、チーム全体を強くしたほうが全体のタイムが上がる。しかし現状はというと、チーム全体で真ん中よりも少し下のレベルに合わせたタイム設定であったり、練習内容になっているということについても

川嶋氏は触れ、チーム全体、陸上界全体を強くしたいと思っても、指導者も箱根で優勝を目指さなければいけないという使命から、理想と現実のギャップに悩むこともあるという姿も垣間みられた。

こういった問題も、ランニング学会の場で問題提起されたことの意味は大きい。ランニング愛好家から世界のトップレベルの選手までが一堂に会し、諸問題に取り組む姿勢が感じられる学会であった。

## ●アスレティックトレーニング

## JATO第7回年次総会開催

日本におけるATC（NATABOC認定アスレティックトレーナー）が一堂に会し、アスレティックトレーニングの普及や教育活動、職業的地位の確立を目指す団体、JATOによる「第7回アスレティックトレーニングシンポジウム」が、去る3月18～19日の両日にわたり、東京ビッグサイト（東京都江東区）にて開催された。

今回は米国スポーツメディスンマネージメントコンサルタンツ社よりドン・ロー氏（元シラキュース大学）が招待され、「現代のスポーツメディスンチーム～その管理者、ケア提供者としてのアスレティックトレーナー」と題して講演を行った。ドン氏は冒頭で「現代はスポーツ医学的サポートをチームとして行っている」と述べた。そのなかでもアスレティックトレーナーは、現場での活動の他に管理者としての役割が求められるようになってくるが、それらを専門に学ぶ機会はなく、実際の経験から学んでいくというのが実情である。こうした点を踏まえ、よい仕事をしていくには、よい人材とめぐり合い、よい環境を用意すること、



ランニング学会でシンポジストを務めた指導者の面々

## ON THE SPOT

よく話し合うこと、スタッフに仕事を任せて管理者としては後方支援を行うように務めること、リラックスできる時間をつくる必要があるということなどをドン氏は説き、「生きるために働くのであって、働くことが人生のすべてではならない」とスポーツ医学的なチームを管理していくうえでのアドバイスを述べた。

続いて岩崎由純氏（NECレッドロケッツ）が講演。岩崎氏はアメリカ留学中にバレーボールのナショナルチームに帯同した経験があり「助っ人として来日した選手から、チームに対して要請があり、アスレティックトレーナーとして働くことになった」と現在の仕事に就いた経緯を説明し、海外遠征先で旧型の審判台を使っていたのを見過ごしたために起こった事故や、食事に対する配慮、保険、ドーピング検査など、現場ならではのエピソードを披露した。

高橋忠良氏（早稲田実業学校）は「高校アスレティックトレーニング普及の第一歩」と題した講演を行った。高橋氏は高校野球のコーチとして活動していたが、4年間に2件の死亡事故を経験し、命を守ることに対して大きな責任を感じるようになり、アメリカに留学しATC資格を取得後に帰国した。その後尽誠学園高校を経て、早稲田実業高校で各部活動の選手にケアを行うようになった。「まだアスレティックトレーナーの業務内容が十分に顧問の先生方に知られていないのが現状であり、カルテ管理をどのようにしていくかなど課題は多くある」としながらも、「将来的にはインターン受け入れをしていきたい」と、高校における常勤アスレティックトレーナーとしての役割や今後の目標についてまとめた。

2日目は、まず鹿倉二郎氏（JATO

会長、（株）アシックス）が「JATOの歴史と日本におけるATの今後」と題した10周年記念講演を行い、1929年頃からの日本および米国でのアスレティックトレーナーの活動や組織化についてまとめた。

さらにこの後、教育現場での変化と試みというテーマで、東伸介（立命館大学）、吉田早織（東海大学）、濱村真佐美、渡邊耕太（ともに福岡リゾート&スポーツ専門学校）の4氏が、それぞれの活動内容や教育システムについて語った。

さらにATCの新しい試みとして、鈴木岳（R-body Project）、本多奈美（りとるジム）、岸邦彦（山梨学院大学YGACC）各氏の発表から、新しい形態でのアスレティックトレーナー活動について模索している様子が示された。

今回のシンポジウムは10周年を機に開催されたということもあり、部位別、個別のテーマではなく、日米両国のアスレティックトレーナーのこれまでを振り返り、今後のあり方を考える内容であった。今年度はWFATTのワールド kongress が日本で開催されることも決定しており、日本から世界へ、そして日本国内へのアスレティックトレーナーの普及にもつながることを期待したい。

### ●スポーツ交流

## 障害者・健常者がスウェーデンへスポーツ体験旅行実施

冬には-35℃まで冷え込む極寒の地。北極圏に程近いスウェーデン北部のブーデン市の体育館で、脳性麻痺による重度障害を持つ参加者の1人が、稽古着で凛々しく構える。去る2月6～15日の10日間にわたり、普段は電動車椅子を利用する脳

性麻痺による重度の身体障害、知的障害、聴覚障害を持つ3名の障害者と国際武道大学のスタッフの総勢9名が、スウェーデンノルボッテン障害者スポーツ協会の全面協力による、健常者も減多に体験できない冒険旅行である“スポーツ体験ツアー”にチャレンジした。

飛行機を2回乗り継ぎ、現地まで約18時間。宿泊はスウェーデンナショナルチームが合宿する、トレーニングルーム、常圧低酸素室、サウナ、測定実験室が完備されている施設を利用した。滞在中には、この施設で合宿していたスウェーデン代表選手のトリノオリンピックでの活躍をテレビ中継で応援した。

スウェーデンでは、多くの人々が生活の中でスポーツを楽しみ、障害者・健常者がともにスポーツを楽しむノーマライゼーションが実現している。その土地の人と交流しながら、参加者たちもさまざまなスポーツを体験した。

10日間で、スキー（チェアスキー）、スノーモービル、水泳、卓球、ホッケー、ボッチャ、空手道などさまざまなスポーツをともに楽しむ。車椅子卓球では、スウェーデンチャンピ



広い交流が図られたスウェーデンでのスポーツ体験旅行

オンと対戦する機会にも恵まれ、全く歯はたたなかったが、自然体なチャンピオンとの交流で参加者からは笑顔がみられた。

今回参加した全員が空手道を研鑽している。始めたばかりの2年前と比べると、稽古をしているなかで、ほぼ寝たきりだった道場生が自力で上半身を起こすことができるようになったり、脳性麻痺による不随意運動がひどく、腕をぎこちなく動かしながら自動車を運転した道場生が、非常にスムーズに運転できるようになったなど機能改善もみられ、この道場生は、入門したての健常者の指導にもあたるようになったほどだ。

今回の参加者である国際武道大学空手道部員4名は、スウェーデン滞在中に開催された空手道国際大会ブーデンオープンにも出場した。聴覚障害を持つ1人の学生は、男子組手-70kg級で優勝。無差別級でも、20cm以上の身長差など感じさせない果敢な攻めで次々と対戦相手を破り、日本人同士の決勝戦で会場中のカメラがコートに集まり観客が沸くという光景がみられた。

参加者たちは、障害を持っていても頑張っている姿に感動するというのではなく、それぞれが学ぶ。大切なのは、チャレンジすることを持っている幸せや豊かさに気づくかどうか。障害がなくても、一生涯チャレンジのない人生ではつまらない。チャレンジし続けることが、人を変え、世界を変える。スポーツは、1人1人のチャレンジが実現可能であり、年齢、障害の有無、レベルに関係なく、すべての人がスポーツによって自分を表現することができる。

障害者が海外旅行に出かけるのは難しい。旅行会社からの事故などに対する危機感に、不満を募らせる障害者のクレームへの恐怖感が拍車を



日本代表を目指しセレクションに臨む選手たち

かけ、悪循環に陥ることもある。最近では障害者のニーズに対応する旅行会社も出始めているが、まだまだ量、価格面などで十分とは言えないのが現状だ。そこで、国際武道大学学生スタッフはSPEED (The Sports Programs of Expansion Experience for the Disabled) という障害者スポーツ旅行を企画するための非営利団体を創設した。このスポーツ体験ツアーを通して、健常者は障害者の新たな仲間から学び、障害者は自らの意志で経済活動に参加する。そして、参加料金の一部は、ノルボッテン障害者スポーツ協会にプールされ、スウェーデンと日本の障害者へのスポーツ振興にあてられる。費用は、1人約20万円程度。来年以降も定期的な開催を続けていくためのチャレンジが続く。詳細は (<http://speed.upper.jp/>) をご覧ください。(報告者：国際武道大学非常勤講師・井下佳織)

#### ●女子野球

### 第8期日本代表 セレクション開催

クラブチームへの女子選手の入部や、大学リーグへの本格参戦で注目

される、女子硬式野球の日本代表セレクションが、去る3月18、19日の両日にわたり千葉県市原市にて開催された。海風とも言うべき強風のもとで行われたセレクションには、120名を超える参加者が全国各地から集い、代表入りをかけ、よりよいプレーをアピールしようとする選手たちの熱気で溢れた。

これまで日本代表は広瀬哲郎氏(野球解説者)が監督を務め、チームを率いてきたが、今回からはヘッドコーチであった大倉孝一氏(元NKK野球部コーチ)が監督に就任。「これまでの実績にこだわることなく、世界で勝てるチームをつくるための選手を選びたい」という大倉氏が見守るなか、セレクションがスタートした。

まず驚かされるのは、そのレベルの高さ。これまで世界選手権で連覇を飾るなど、そのレベルの高さは発揮されていたが、世間からの注目を浴びたことにより、セレクションに参加した選手たちの実力も注目度に比例して、向上していることを示す。なかにはユニフォーム姿ではなく、ジャージ上下でおぼつかない動きをみせる参加者もいるが、日本女子野球協会広報の胡桃広伸氏は「高

いレベルの選手だけでなく、さまざまな選手たちが集まってきて、より高い目標へ到達する。参加者が増えているということが、大きな成果だと捉えています」と語る。

東京を拠点に活動する「ウェルネス東京レディース」に所属し、今回初めてセレクションに臨んだという内記美玖選手は、フリーバッティングを終え「こうした環境で野球ができることが嬉しい。セレクションに集まっている人同士でたくさん話をして、いろんなことを学んでいきたい」とフリーバッティングでしびれた手をさすりながら、笑顔をみせた。

2日間のセレクションを経て20名の代表候補選手が決定。来る8月に台湾で開催される予定の「第2回女子ワールドカップ」への出場を目指す。本年4月からは尚美学園大学にも女子硬式野球部が発足するなど、さらに新しい動きも始動しつつある。どう育て、どう根づかせるか。今後の女子野球日本代表の活動からも、その真価が問われていくのではないだろうか。

#### ●アスレティックトレーナー連絡会議

### ネットワーク構築に向けて

日本体育協会公認アスレティックトレーナー制度ができてから12年が経過し、有資格者は現在800名を超えている。アスレティックトレーナー相互の連携を密にし、活動促進、情報交換などについて協議する場として、日本体育協会では、去る3月28日に岸記念体育館(東京都渋谷区)にて平成17年度アスレティックトレーナー連絡会議を開催した。

まず連絡会議の運営委員長を務める村木良博氏((有)ケアステーション)から、「連絡会議の下に協議会を設け、委員による検討を行ってき

た」と、これまでの経緯が説明された。そのうえで、今回の会議では各都道府県体育協会や中央競技団体といった日体協加盟の団体ごとに公認アスレティックトレーナーを組織化し、「全国的なネットワークの構築を目指していきたい」と今後の方向性が示された。

具体的には「日体協公認AT〇〇協議会」というように各都道府県名が入るような形で立ち上げ、連携や情報提供を行っていくことなどが挙げられ、すでに日体協から各加盟団体へ協力依頼が行われ、組織化の機運を高めるために『スポーツジャーナル』誌上での情報提供、連絡会議などネットワーク機能の充実といった取り組みが行われている。

さらにこれらの報告と併せて、すでに地域や競技団体ごとに活動を行っている4団体からの事例発表も行われた。

まず広島県トレーナー協会の取り組みが浦辺幸夫、宮下浩二(ともに広島大学)両氏から発表された。同協会は1994年のアジア大会、96年の国体開催を機に組織化し、現在では広島県内の高校へのアスレティックトレーナー派遣などを行っている。宮下氏は問題点として「広島県トレーナー協会が県内の体協AT全員を把握できていないこと」として、今後は組織化されていくであろう広島県AT協議会をどのように位置付けるかを考え、「県トレーナー協会とのかかわりについて検討する必要がある」と述べた。

次に関西連絡会の取り組みについて、小柳好生氏(武庫川女子大学)が設立経緯と学生向けセミナーなどの活動内容を報告した。今後については、私見であるとしながらも「現在の関西連絡会を発展的に解消あるいは独自に続けることも検討したい。

会議体の形で存続するのも意義あることではないか」と語った。

地域単位ばかりでなく、中央競技団体である「(財)日本陸上競技連盟医事委員会におけるアスレティックトレーナーの組織活動」として、岩本広明氏(ミズノ(株))から、A~C級の登録制度の実際、日本陸上競技連盟主催大会への3ステーション制による派遣の様子を報告した。さらに、日本ラグビー協会の取り組みについては石山修盟氏(仙台大学)が説明し、トップリーグにおけるトレーナー部門のミッションについて紹介した。ラグビーではゲーム中の安全を確保するために、公平な立場で応急処置にあたることを可能にするために、安全対策委員会の講習によって「メディカルサポーター」を育成している。協会として1人の専任トレーナーを採用し、トレーナーセミナーや研修会を行っていることなどに触れ、雇用の可能性があることが示された。

最後には実際の組織化にあたって考えられる課題について、各都道府県や競技団体の代表委員と前述の村木氏によるディスカッションが行われた。ここではたたき台としての規約案も提示され、既存の団体との協力体制のとり方、各団体で協議会を組織化する場合の資金源をどのように確保するかについて話し合われた。

地域や競技別の日体協公認ATのネットワークが整備されることによって、全国規模の大会に限らず、地域の競技会でもアスレティックトレーナーによるサポート体制をとれるようになる可能性が高くなる。また、大会や遠征への帯同だけでなく、日常の練習における日体協公認AT派遣の基盤ともなり得るだろう。今後の全国ネットワーク化への組織的な取り組みに期待したい。